九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

資料調査 ： 上海のユダヤ人難民社会の教区新聞の記事から(1939年)(下)

阿部, 吉雄
九州大学大学院言語文化研究院 ： 教授

https://doi.org/10.15017/1456021

出版情報：言語文化論究. 31, pp.77-87, 2013-09-30. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：

資料調査：
上海のユダヤ人難民社会の教区新聞の記事から（1939年）（下）[注1]

阿　部　吉　雄

はじめに

迫害によって国内のユダヤ人を半強制的に国外へ移住させるナチスドイツの政策は、1938年11月９日から10日にかけての水晶の夜事件でその頂点に達した。同年３月に併合された旧オーストリアを含むドイツ全土におけるこの反ユダヤ人暴動により、多くのシナゴーグやユダヤ人商店が破壊、放火、略奪された。また数万人のユダヤ人男性が逮捕され、強制収容所へ送られた。今やユダヤ人たちは必死に海外移住の道を探したが、彼らを歓迎する国はなかった。唯一中国の上海租界だけは移住のためのビザ等を必要としなかったため、1938年12月から1939年８月までの９ヶ月間、毎月1000人以上のユダヤ人難民が押し寄せた。その数は1939年８月時点で１万5000人以上に達したと推定される。

言語も習慣もヨーロッパと大きく異なる上海において、ユダヤ人難民たちは上海在住のセファルディ系ユダヤ人社会とロシア系ユダヤ人社会ならびに海外、特にアメリカのユダヤ人社会からの支援を受けながら生活の再建に取り組んだ。他方で難民たちは自らのユダヤ性とも向き合わねばならなかった。ヨーロッパにいた時、彼らの多くは自らをユダヤ人としてではなく、ドイツ人やオーストリア人として認識していたにもかかわらず、ユダヤ人であるがゆえに迫害を受け、上海ではユダヤ人同胞から支援を受け、同じ境遇のユダヤ人難民のコミュニティの存在を前提として経済的自立を目指していたからである。

上海へ移住した当初、ユダヤ人難民たちはセファルディ系ユダヤ人社会やロシア系ユダヤ人社会のシナゴーグでの礼拝に参加していたが、言語や様式の違いもあり、難民たちはまもなく独自の礼拝を希望するようになる。試行的に行われた難民だけによるドイツ式の礼拝が成功した結果を受けて、上海在住の両ユダヤ人社会による支援組織「上海ヨーロッパ系ユダヤ人難民支援委員会」（Committee for the Assistance of European Jewish Refugees in Shanghai / CFA）下の組織として1939年７月に誕生したのが「上海ユダヤの宗教的共同体」（die Jüdische Kultusgemeinde Shanghai）（以下、「上海ユダヤ教区」、「ユダヤ教区」または「教区」）である。そして11月には上海ユダヤ教区はCFAから独立する。[注2] 宗教面に重点を置いた組織として発足した上海ユダヤ教区であるが、1941年12月に太平洋戦争が始まり、上海が日本軍の支配下に置かれてからは、あらゆる面でユダヤ人難民社会を代表する唯一の組織となる。

本稿は、発足まもない上海ユダヤ教区が発行を始めた『ユダヤの宗教的共同体教区新聞』（das Gemeindeblatt der Jüdischen Kultusgemeinde）（以下、「教区新聞」）の記事の分析を通して、当時のユダヤ教区、ひいては難民社会に関する新たな知見を得ようとするものである。[注3]

1939年10月20日号（第６号）

第１面すべてを占める「ユダヤの島」（第１面194行）でラビ Karl Heinz Sober[注4]は、ユダヤ人難民社会には生活苦という短期的な問題だけでなく、長期的な問題として精神的、文化的問題があると論じる。自分たちは地理的に、特に戦争のためヨーロッパの精神的、文化的生活から切り離され、また中国のアジア文化の中で孤立している。上海のユダヤ人難民社会は「（単に）ユダヤの血統を引く大衆である移住者の集団から」、「真の正当なユダヤのコミュニティに変わらねばならない」。ここで Sober は多くのユダヤ人難民がユダヤの文化的および宗教的特性をすでに失っていると指摘し、「内面から真のユダヤのコミュニティが新たに生まれることができるため」には、「（移住によって）救われたユダヤの精神的、道徳的、そして倫理的力の残余を計画的に統合」しなければならず、「長期的展望に基づいた青少年向け授業と成人向け人間形成における教育活動を必要とする」と主張している。Sober の意見が正しいかどうかは別として[注5]、ドイツにおける反ユダヤ主義のためにユダヤ人難民たちが上海に逃れたことは事実であり、彼らが集団として結束しようとすれば、ユダヤ教やユダヤ性をその核に据えようという考えが出てくるのは自然なことであったろう。

「Atr.」の署名による「文化生活より」（第２面80行）では、９月29日号（第３号）で予告された「ユダヤ音楽」コンサートが10月12日（木）に American Women's Club で行われたことを紹介している。「意識的にユダヤの思考を音楽に持ち込み、意識的にユダヤ音楽を作ることに参加しようとする多くのユダヤ音楽家の作曲を紹介する」という「それ自体歓迎すべき試みは、当然ながら実験段階を超えることはできなかった」と論者は評する。その理由として、「故郷の土地に根付いている」「国民的ユダヤ音楽はまだ存在しておらず」、また「私たちの先唱者の歌唱はその起源をやはり外国の文化と影響に負っているから」、「ユダヤの宗教的音楽は同様に存在しない」と言う。ユダヤ文化を重視するとしても、ヨーロッパ文化もまた中欧系ユダヤ人難民たちのアイデンティティの重要な一部分なのである。

「曾お祖母さん、お祖母さん、お母さん、そして子ども」（第２面25行）では、９月14日号（創刊号）で広告を掲載している喫茶・レストラン Helvetia の創業者一族が写真付きで紹介されている。彼らは元々ダンチィヒで暮らしていたが、故郷がポーランド領になると1921年にベルリンに移住し、上海へは再移住になる。この一家のように、上海のユダヤ人難民には第１次世界大戦後にドイツやオーストリアから独立することになる東欧諸国で生まれた者が少なくない。その理由として、彼らの半数以上が20年前の最初の移住の際に既に就労年齢に達しており、その時の経験によって異なる環境に適応する気概と能力を獲得していたことが考えられる。[注6]

「mr.」の署名がある「Thespis Karren」（第２面50行）では、10月13日号（第５号）で予告されたハンガリーのユダヤ人作家 Franz Molnar（1878～1952年）の喜劇『城の中の遊び』が期待以上の成功だったと伝えている。ユダヤ人難民俳優たちの団体 Thespis Karren が10月17日（火）に上演したもので、主要な出演者として Karl Bodan、Fritz Heller、Harry Walden、Olga Hajegg、Siegfried Katznol-Cardo、Fritz E. Jonas、Walter Berg の名前を挙げて個別に講評しており、評者が文学の専門的知識を有していることを窺わせる。[注7]

「上海ユダヤ教区の礼拝」（第３面７行）では発行日の10月20日（金）の早朝（５時45分、６時）と翌21日（土）の朝（７時、９時、９時15分）の礼拝の案内が行われ、以前の号と同様、名目上の発行日よりも前に教区新聞が配布されていたことが分かる。礼拝の場所は Seymour Road シナゴーグ、Museum Road シナゴーグ、Ward Road シナゴーグである。[注8]

「ユダヤ教区の英語集中コース」（第３面８行）は、ユダヤ人難民が上海租界で職を得るのを容易

にするための虹口・揚樹浦地区での英語コースが10月23日（月）に始まることを伝えている。

「ユダヤ教区が支援します！」（第３面10行）では、近づく冬に備え、教区の福祉部門が石炭と衣料の支援を予定しており、そのための募金・供出を呼びかけている。

「他人の所有物を保持しないで！」（第３面25行）は、「上海ヨーロッパ系ユダヤ人難民支援委員会」（CFA）から毛布、乳母車、かごを貸与され、もはや必要でなくなった者は返却するよう求めている。この記事の筆者はCFAの業務執行者Kurt Marx博士となっているが、彼はユダヤ教区の業務執行理事でもあり、上述したようにこの時期はまだユダヤ教区がCFAから独立していないことが分かる。[注9]

「Sonnenschein －マチネー」（第３面25行）は、音楽家のSiegfried Sonnenscheinの第１回マチネー（昼興行）が10月22日（日）午前10時30分に虹口・揚樹浦地区のEastern劇場で行われると予告している。Sonnenscheinが作詞作曲した「さあ、弱気にならずに」が上海で初めてInge Baruchによって歌われる。[注10] この催しの売上金の一部は、CFAとは別の支援組織「ヨーロッパ系難民救援国際委員会」（International Committee for Granting Relief to European Refugees / IC）のミルク基金に寄付されるという。

「Hans Baerのピアノの夕べ」（第３面11行）では、11月２日（木）午後９時にAmerican Women's Clubで開催されるクラシックコンサートを予告する。Hans Baer[注11]は上述の「ユダヤ音楽」コンサートの中心人物でもある。

「ヨブ。ある平凡な男の話」（第３面82行）は、10月13日号（第５号）から連載を始めたオーストリアのユダヤ人作家Joseph Roth（1894～1939年）の小説の第２回である。

「青少年コーナー」（第４面57行）は10月13日号（第５号）で予告された青少年向けの欄である。関心があることについて「Kurtおじさん」[注12] 宛てに手紙で報せてくれるよう子どもの読者に呼びかけている。その他には言葉当てゲームや、裁判官が父親の墓石を叩けと命じても叩かなかった息子に父親の財産を相続させる話「品位ある息子」（第４面28行）がある。

「mr.」の署名がある「Alcockハイムでの多彩な夕べ」（第４面27行）は、自力で部屋を借りることができない最も貧しいユダヤ人難民約2500人用に虹口・揚樹浦地区に数ヵ所設置されたハイムという収容施設のひとつで行われた歌謡、朗読、手品、漫談等のショーを紹介している。広い空間に２段ベッドがぎっしりと並べられ、プライバシーはカーテンで仕切られた自分の寝床だけという環境で暮らす人々のための慈善活動という意味もあったと推測される。Erich Rawitz-Riwatz、Fritz Schnitzer、Kurt Rothschild、Gerd Kohbieter、Leo Plohn、Gerhard Gottschalk、Hersch Friedmann、Heinemann Alexander、K. P. Loewenbergerが出演した。[注13]

1939年11月17日号（第10号）

この号以降「10セント」の表記がある。ユダヤ人難民による一般の新聞『Shanghai Jewish Chronicle』の同時期の価格が15セントだった。上述のように11月に支援組織のCFAから宗教的に独立したユダヤ教区が、資金難からユダヤ教区の会員への無料配布を止めたのか、それとも会員でない者に販売するようになっただけなのか不明である。

ユダヤ教区の副会長であり礼拝責任者のHugo Kaufmann[注14]は「私たちの教区！」（第１面234行）において、水晶の夜事件により故郷を追われた自分たちにとって衣食住は解決すべき焦眉の問題であるが、「見知らぬ大地の上で、私たちがそれをユダヤ人として愛するようなひとかけらの故郷を再び建設するために」、「私たちはヨーロッパで壊された家を、その中で私たちのユダヤの生活がその

中心点を持つ建物、すなわちユダヤ教区を再び建てねばならない」とユダヤ教区の精神的な意義を強調する。そして礼拝委員会の委員長として「私たちは独自の教会を建てたい！私たちは独自の場所で私たちの常設の礼拝を行いたい！」と切望する。[注15] また Kaufmann は「今日まったく無意味で役に立たず、教区の存立のために危険な争いが行われている」と述べており、ユダヤ教区の運営を巡って意見の対立が存在したことが窺える。

教区新聞が名目上の発行日よりも前に発行・配布されるということもあって、11月17日号は事実上水晶の夜事件（1938年11月９～10日）の１周年後初めて制作され発行された教区新聞になる。ユダヤ教区会長の Leopold Steinhardt[注16] は「声明、ユダヤ教区の冬期助け合いの実施へ向けて」（第１～２面130行）において、まず水晶の夜事件と現在もヨーロッパで迫害に苦しんでいるユダヤ人同胞について「宗教が命じる形式で、１年前に故郷にあった私たちの教会が廃墟と化したその時間の祈りにおいて想起した」だけで、「私たちはデモも、声明も望まなかった」と言う。そして慈善は教区の当然の任務とし、ハイムの住民以外にも高齢かつ病弱で、「神経が衰弱しており、自力で何とかすることは全く不可能」な多くの人々が冬の寒さをしのげるように、「暖が取れる部屋（複数）を設置したり、衣服を調達したり」するために募金を呼びかけている。その担当者として Leopold Steinhardt、Edgar Götzel、Julius Stern、Samet 博士、Arthur Braun、Wolfgang Pischer、Frederic Bloch、Lesser 博士らの名前が挙げられている。[注17]

「ユダヤ教区の冬期助け合い」（第２面46行）では、１口10ドルの寄付を行った16の個人と会社が紹介されている。１つの会社は２口寄付した。

Max Heinrich の詩『道の足跡』（第２面21行）は「不安な永遠へ向かって」自分たち全員が遠い道を行く、と先の見えない上海での難民生活を、ひいてはすべてのユダヤ人の運命を描写している。

「私たちの教区からの家族の知らせ」（第２面30行）として、１人の新生児の誕生（11月10日生まれ）がその名前、両親の氏名、住所とともに、さらに１組の結婚がやはり夫婦の氏名とともに紹介される。また４人の死亡が本人の氏名、住所、出身地、没年月日（11月８～11日）とともに示されている。うち２人は蘇州河北側の Shanghai General Hospital で亡くなったと記されている。

Kurt Radt[注18] は旧約聖書創世記第28章に関する「今週の教え」（第２面92行）で、ヤコブが夢の中で見た天国への梯子について、ヤコブが神とその祝福を想って眠りについたゆえに、神が夢の中で慰めに満ちた約束を伝えたと解釈する。それゆえ自分たちユダヤ人難民は、苦難の中でも静かで信心深い心情を持ち続けなければならないと説く。

「上海ユダヤ教区の礼拝」（第３面７行）では、名目上の発行日の11月17日（金）早朝（４時30分、５時45分、６時）と18日（土）朝（７時、９時15分）の礼拝の案内が行われる。場所は Seymour Road シナゴーグ、Museum Road シナゴーグ、Ward Road シナゴーグである。虹口・揚樹浦地区の Ward Road シナゴーグでの早朝礼拝には「説教：ラビ Sober、先唱者：Hersch Friedmann」とある。[注19]

「ヨブ。ある平凡な男の話」（第３面221行）は Joseph Roth の小説の連載第５回である。10月20日号（第６号）が第２回だったので、本来ならばこの号は第６回になるはずであり、その間に１回休載したことになる。しかし後述の12月22日号（第15号）が第11回であり、逆に１回分多くなることから、連載「第５回」は「第６回」の誤りであろう。

この号から「Kurt 叔父さん」による「青少年コーナー」（第４面102行）には、Heinz Compart[注20] がデザインした「若者がユダヤの旗を持っているタイトル」が付く。読者から寄せられた懸賞作文の最優秀作が紹介されており、その内容から難民の子どもたちは大人たちと違い、ヨーロッパとは異なる上海の情景や中国人との触れ合いを楽しんでいることが窺える。

「少年合唱団の設立」（第４面30行）では、礼拝の合唱団に参加することを希望する「義務教育の

年齢の少年」を募集している。虹口・揚樹浦地区の礼拝への参加はユダヤ教区事務所が、Seymour Road シナゴーグでの礼拝への参加は先唱者の Max Warschauer が窓口になる。[注21] また、家族の出来事（誕生、ユダヤ教の成人式であるバルミツバー、婚姻、離婚、死亡）はすべて遅滞なくユダヤ教区へ届け出るように求めている。事務所の受付時間は平日９～12時および14～17時、金曜日９時30分～16時、日曜日９～12時、それ以外に緊急の場合は土曜日と日曜日の14～16時とされており、ユダヤ教区が本格的に活動していることが分かる。

1939年12月22日号（第15号）[注22]

Jacob Gesang[注23] の署名がある「ユダヤ教の象徴」（第１面194行）では、住居のドアの柱に取り付けられる Mesusa という容器や、前頭部に紐で結び付けられる Tefillin という小さな箱について詳しく説明される。それらには日々の祈祷が書かれた羊皮紙が入れられており、いずれもユダヤ教への信仰告白を外面的に見えるようにするものである。Gesang はユダヤ教の象徴に「神秘的なものはなく」、「世界中のユダヤ人たち同士の結びつきを可能にしてきた」と論じている。

11月17日号（第10号）にも執筆していたユダヤ教区副会長 Hugo Kaufmann による「ユダヤ教区における選挙を求める声」（第１～２面153行）では、ユダヤ教区理事会の普通選挙に言及されている。事の発端は、ユダヤ難民による新聞のひとつである『S. Z. am Mittag』が12月19日の社説で、ユダヤ教区の「最初の、すなわち主要な困難が克服された今日、諸要素または諸グループまたは個々人が「舞台裏で」活動し、教区を特別の利害の手玉にしている」と論じたことである。Kaufmann はこの批判に対し、「私たちが働いているのは教区のため、私たちのユダヤ人コミュニティのためだけであり、個人や個々のグループのためではない！」と強く反発し、「全ユダヤ人の利害の公式で唯一の代表者」として「祭式の問題であれ、社会福祉の問題であれ、ユダヤ文化の領域であれ、ユダヤ教区は指導力を発揮してきた」と、その創設者であり現在の会長である Leopold Steinhardt 以下の現理事会の功績を強調する。しかしユダヤ教区の活動が確固なものになりつつあるので、しばらく前から普通選挙の準備を進めていると内情を明かしている。[注24] どちらの主張が正しいかは不明だが、このような論争は、上海のユダヤ人難民社会においてユダヤ教区の存在感が非常に大きなものになっていることを示している。またそれゆえに普通選挙を求める声を、教区設立以来の理事会も無視できなくなっていたと考えられる。

「Lr. 博士」という署名のある「私たちのハヌカ祭」（第２面122行）は、ユダヤ教区が行なったハヌカ祭について伝えている。これはキリスト教のクリスマス同様、子どもたちのための催しで、虹口の Eastern 劇場は満員になり、上海ユダヤ人学校（Shanghai Jewish School）には450人が集まった。[注25] ユダヤ人難民による「室内管弦楽団1939」による演奏と、教区新聞の「青少年コーナー」の担当者「Kurt おじさん」やラビ Josef Zeitin 博士の話で始まり、歌、お菓子のプレゼント、人形劇、踊り、マジックなどが子どもたちを喜ばせた。上海ユダヤ人学校での催しにはセファルディ系ユダヤ人の子ども80人も参加し、ラビ Sober が英語で話をした。ユダヤ教区の設立は、難民社会が上海在住のセファルディ系およびロシア系ユダヤ人社会から宗教的に独立することを意味したが、だからこそ「私たちの教区の側から、すべての私たちの宗教的同胞と関係を維持し、さらに育てる努力」が必要だった。

「Museum Road シナゴーグでのタルムード・トーラーの厳粛な開所式」（第２面65行）は、指揮者 Martin Epstein、上級先唱者 Rotenberg、シナゴーグの合唱団による歌唱、ロシア系ユダヤ人の重鎮ラビ Meier Ashkenazi や来賓のユダヤ教区理事会代表らの祝辞など、式典の様子を伝えている。[注26] タ

ルムード・トーラーとはユダヤ教徒の子弟にヘブライ語やユダヤ教を教える学校であり、ユダヤ教区では1939年12月に黄浦江以北の虹口・揚樹浦地区にある Ohel Moishe シナゴーグに開校された。最初の生徒は35人だったが、1941年には120人、1944～1945年には300人が通った。[注27] この記事では黄浦江以南の共同租界にある Museum Road シナゴーグでの開所式を紹介しており、「このめでたい催しに私たちの教区も招待され」と述べているため、セファルディ系ユダヤ人の子弟のためのタルムード・トーラーだったと考えられる。ユダヤ教区のタルムード・トーラーの生徒向けの「授業で扱った内容に関する短い審問が、居合わせた客たちに生徒たちの能力やタルムード・トーラーの教え方を理解させた」とあり、上海への中欧系ユダヤ人難民の流入が、在住のユダヤ人社会に自らのユダヤ性を意識し直すという影響を与えたことが見て取れる。

「ヨブ。ある平凡な男の話」（第５面275行）は Joseph Roth の小説の連載第11回である。その最後は文の途中で中断し、「続く」となっている。予定していた他の記事が間に合わなかったか、広告が取れなかったために、やむを得ず小説の内容上の構成を無視して紙面を埋めたと考えられる。

1939年12月29日号（第16号）

ユダヤ教区新聞は創刊以来毎号６ページの構成だったが、1939年の最後に発行されたこの号は４ページからなっている。[注28]

教区会長 Leopold Steinhardt による「ユダヤ教区の理事会選挙に寄せて」（第１面210行）は、12月22日号（第15号）の「ユダヤ教区における選挙を求める声」でのユダヤ教区副会長 Hugo Kaufmann の発言に対して行われた日刊紙『S. Z. am Mittag』の12月23日号の批判に反論している。理事会の普通選挙に向けた準備のテンポが遅いという批判に対して、Steinhardt は選挙を実施するには一定の準備期間が必要である、しかしそれは半年を越えることはないと主張する。また現在計画されている「新しいメンバーの補充による今日の理事会の拡大」[注29] を『S. Z. am Mittag』紙が「世論の偽造」と批判するのに対し、Steinhardt は「その唯一の目的はすでに現時点において、理事会により広範な基礎を与えることにある。この基礎の上に立って、理事会が普通選挙の準備を軌道に乗せようというものである。私たち移住者のユダヤの生活において、何らかの特別の役割を果たしている人々を選ぶよう配慮された。さらに、彼らを加えることにより、これまで存在していたある種の対立が除去されるか、少なくとも調整されるはずである。しかしこの追加は決して普通選挙を出し抜いて、「民衆の意思」に理事会の現在の編制を押し付けたりする意図はない」と反論している。

「ジークムント・フロイトの棺の傍らでの言葉。シュテファン・ツヴァイクによる」（第１～２面187行）は、９月23日にロンドンで亡くなったユダヤ人精神分析医の Sigmund Freud（1856～1939年）への、同じくイギリスに亡命していたユダヤ人作家 Stefan Zweig（1881～1942年）による弔辞を掲載している。[注30]

ラビ候補生の Rafael Eisenberg[注31] は「ユダヤにおける労働と仕事」（第２面120行）において、聖書の「人間は仕事をするために生まれた」という言葉を挙げ、そのための活動本能を神から与えられたと言う。また「仕事を愛せよ。仕事と結び付いていないいかなる教えも消え、罪をもたらす」や「自らの手による苦労に満ちた所得を味わった者は、敬神であっても仕事に近寄らない学者よりも偉大である」というタルムードの一節を引用し、働く者だけが神の祝福を期待できると主張する。ユダヤ人難民が上海で職を得るのは容易でなく、支援組織の援助に頼って暮らさざるを得ない人々が多かったが、Eisenberg は仕事に就かない無為な生活が宗教心を弱めてしまうと考えたのであろう。

「礼拝の配置」（第３面10行）は12月29日（金）早朝（５時40分、６時30分）と30日（土）朝（７

時、９時15分）の Seymour Road シナゴーグおよび Ward Road シナゴーグで行われる朝の礼拝について、説教者（ラビ Ehrenberg）や先唱者（Warschauer、Hes）の名前を含めて案内している。[注32] 以前の号の案内によれば Museum Road シナゴーグでも行われていたが、礼拝の参加者が減ったのであろうか。

「ユダヤ教区の家族の知らせ」（第３面31行）として、１組の双子の新生児の誕生（12月19日生まれ）がその名前、両親の氏名、住所とともに紹介される。さらに１組の結婚がやはり夫婦の氏名、出身地とともに[注33]、また６人の死亡が本人の氏名、出身地、住所、没年月日（12月15日～24日）、亡くなった場所とともに示されている。死亡者の年齢の表記はないが、１人は「子ども」と記載されている。亡くなった場所は自宅が２人、ハイムに併設された Whashing 病院２人と Chaoufoong 病院１人、Shanghai General Hospital が１人である。

見出しはないが「K. R.」の署名で[注34]、蘇州河以南の共同租界にあるセファルディ系ユダヤ人社会の上海ユダヤ人学校が、新年度に５～10歳の生徒を幼稚園および低学年クラスに受け入れ可能であることを伝えている。（第３面12行）条件は共同租界とフランス租界に在住していることとしており、黄浦江以北の虹口・揚樹浦地区のユダヤ人難民の子弟のための「上海ユダヤ人青少年協会学校」（Shanghai Jewish Youth Association School）が1939年11月に正式に開校したものの、共同租界やフランス租界からは通学するのに市街電車で１時間もかかり、小さな子どもには困難だったことへの配慮であろう。[注35]

「福祉部門からのお知らせ」（第３面13行）は困窮した難民のために、冬用コート、毛織の下着、靴および子供用ベッド１台の譲渡を呼びかけている。

「ユダヤ教区のラビからのお知らせ」（第３面13行）では、教区事務所でラビ Zeitin 博士が木曜と土曜、ラビ Sober が月曜と水曜の午後１時間面会を行うと伝えている。教区民の宗教的・精神的な相談の相手をするのであろう。

「今週の教え」（第３面96行）で Kurt Radt は旧約聖書出エジプト記第１～６章について、まずモーセの生い立ちを述べる。そして「神の変更しがたい意思」を聞いた後、モーセは「一生涯、自分の天命と使命において退いたり、揺らいだりすることがない」と言う。自分たち（上海のユダヤ人難民）も「神の名を唱え」、「価値のないものを私たちの生活と活動から脱ぎ捨てるように！」と、現在の困難な状況を神への信仰によって乗り越えるよう励ましている。

「英語集中コースについて」（第３面７行）は英語コース（初心者および上級者）への申請をまだ受け付けると告げている。最初のクラスは上述のように10月23日に始まったはずだが、辞退者や脱落者が多くて中止になったか、第２次のクラスを募集しているのか不明である。このようなユダヤ教区や他の支援組織の努力と難民自身の意欲にもかかわらず、高い出席者数で始まった英語クラスの多くは消滅しがちだった。家族を養わねばならない者は自分の時間を、収入が伴う仕事に直接費やすことを選んだ。

「求職広告」（第３面６行）では「電気工学部門での15歳男性用の見習い職」を探している。教区民のための就職斡旋であろう。上述の上海ユダヤ人青少年協会学校を始め、難民子弟の基礎教育は成果を上げつつあったが、15歳以上の若年者は高等教育も職業訓練も与えられず、失われた世代になりつつあった。

「冬期助け合いへの寄付」（第３面３行）では寄付者１人の氏名、住所、寄付した金額（40ドル）が紹介されている。

「K. S.」[注36] の署名がある「あなたの英語はどの程度？」（第３面31行）は、買い物に必要な程度の英語力を持つ読者の語彙と文法をさらに高めるため、ユダヤ文化に関係する短い英語の文章を次号

から掲載すると予告している。

「青少年コーナー」（第３面61行）では、まずハヌカ祭に関する懸賞作文の優勝者の名前と住所を示し、次に「回心した泥棒」の話を紹介する。自らの盗癖を治したいと相談した若者に、Simon ben Schetach[注37] は嘘をつかないと約束すれば悪癖から解放されると忠告する。若者は留守の隣人の家財をまたもや盗んでしまうが、隣人が帰って来た時に嘘の言い逃れをするしかないことに気づき、盗んだ品物を戻す。担当者は貧困状態にある多くの子どもたちに、嘘つきは泥棒の始まりと教えたかったのであろう。

「ヨブ。ある平凡な男の話」（第４面52行）は Joseph Roth の小説の連載であるが、これまでのように「第〇回」という表示がない。これは上述のように前号（12月22日号）の最後が文の途中で中断し、「続く」となっており、今号でまさに文の途中から再開したため、独立した１回と呼べなかったからと考えられる。

注

1．本稿は拙稿「資料調査：上海のユダヤ人難民社会の教区新聞の記事から（1939年）（上）」、『言語科学』（48）2013年、九州大学大学院言語文化研究院、49～61頁の後編である。

2．David Kranzler: „Japanese, Nazis & Jews — The Jewish Refugee Community of Shanghai, 1938-1945“. Hoboken, New Jersey（KTAV Publishing House）1988（[1]1976）. S. 411 f.

3．本稿で分析する教区新聞は、ドイツ国立図書館のプロジェクト「亡命新聞・雑誌のデジタル化。1933～1945年のドイツ語による亡命定期刊行物」（Projekt “Exilpresse digital. Deutsche Exilzeitschriften 1933-1945”）から著者が入手した1939年10月20日号（第６号）、11月17日号（第10号）、12月22日号（第15号）、12月29日号（第16号）である。1939年９月14日号（創刊号）、９月29日号（第３号）、10月13日号（第５号）の分析については、拙稿「資料調査：上海のユダヤ人難民社会の教区新聞の記事から（1939年）（上）」。

4．Karl Heinz Sober は、1939年11月に上海の The New Star Company という出版社から発行された『Emigranten Adressbuch』（移住者住所録）に「ブレスラウ出身、ラビ」と記載されている。1943年５月以降中欧・東欧系ユダヤ人難民が居住するよう指定された虹口・揚樹浦地区を管轄する提籃橋分局特高股が1944年８月に作成した『外人名簿』には、「27歳、従業員、ドイツ難民」とある。教区新聞では、1939年10月13日号（第５号）に、10月14日（土）の Ward Road シナゴーグでの礼拝の説教を行うことが予告されており、その後もしばしばその名前が掲載されていることから、ユダヤ教区の活動に深くかかわっていたことが分かる。

5．移住した上海において、ともに社会の最下層を構成する住民として、貧しい中国人大衆と連帯するという選択肢もありえたのではないか。

6．拙稿「上海のユダヤ人に関するドイツ総領事館の報告（1940年１月）」、『言語文化論究』（19）2004年、九州大学大学院言語文化研究院、117頁。

7．Karl Bodan は『移住者住所録』に「Karl Bodanetzky、ウィーン出身、俳優」とある。Fritz Heller は『移住者住所録』に「ウィーン出身、俳優」とある。Siegfried Katznol-Cardo は『外人名簿』に「46歳、芸術家、無国籍難民」とある。Fritz E. Jonas は『移住者住所録』に「ベルリン出身、俳優」と、『外人名簿』に「Fritz Edward Jonas、37歳、商人、ドイツ難民」とある。Walter Berg は『移住者住所録』に「ベルリン出身」と、『外人名簿』に「42歳、無職、ドイツ難民」とある。

8．Seymour Road シナゴーグと Museum Road シナゴーグは蘇州河以南の共同租界にあり、上海在

住のセファルディ系ユダヤ人社会が所有する Ohel Rachel シナゴーグと Beth Aharon シナゴーグを指す。Ward Road シナゴーグはユダヤ人難民の多くが住んだ蘇州河以北の虹口・揚樹浦地区にあり、上海在住のロシア系ユダヤ人社会に属する Oihel Moishe シナゴーグである。

9．Kurt Marx は弁護士で、CFA とは別の支援組織「ヨーロッパ系難民救援国際委員会」（International Committee for Granting Relief to European Refugees / IC）の委員でもあった。Heppner は Marx が1939年末にアメリカへ渡ったと伝えている。Ernest G. Heppner: „Shanghai Refuge. A Memoir of the World War II Jewish Ghetto“. Lincoln（University of Nebraska Press）1993. S. 89 f. しかし Ephraim は Marx が1944年にフィリピンのマニラにいたと述べている。Frank Ephraim: „Escape to Manila. From Nazi Tyranny to Japanese Terror“. Urbana, Illinois（University of Illinois Press）2003. S. 118. Ephraim が正しいとすれば、Marx は上海から1939年末にアメリカ支配下のフィリピンへ渡り、そこで1941年12月の太平洋戦争開戦を迎えたことになる。

10. Siegfried Sonnenschein は『移住者住所録』に「ドレスデン出身、ピアニスト」とある。Inge Baruch は『外人名簿』に「28歳、ウェイトレス、ドイツ難民」とある。

11. Hans Baer は『移住者住所録』に「ベルリン出身、ピアニスト」とある。その住所の「153 Route des Soeurs」はフランス租界の高級住宅地に位置する。

12. 1939年９月13～14日のローシュ・ハッシャーナー（新年）の祝祭礼拝で説教や合唱指揮を行っている Kurt Radt と思われる。

13. Erich Rawitz-Riwatz は『移住者住所録』に「フランクフルト出身、作家」とあり、その住所「138 Ward Road」はハイムの場所である。『外人名簿』には「57歳、無職、ドイツ難民」と記載されている。Fritz Schnitzer は『外人名簿』に「35歳、俳優、オーストリア難民」とある。Gerd Kohbieter は『外人名簿』に「22歳、無職、ドイツ難民」とある。その住所「66 An Kuo Lu（Alcock Road）」もハイムの場所である。Leo Plohn は『移住者住所録』に「ウィーン出身、俳優」と、『外人名簿』に「66歳、無職、ドイツ難民」と記載されている。Gerhard Gottschalk はユダヤ教区の業務執行理事の１人であるが、『外人名簿』に「45歳、従業員、ドイツ難民」とある。Hersch Friedmann は『移住者住所録』に「ブレスラウ出身、歌手」とあり、Alcock ハイムの住人である。『外人名簿』には「47歳、無職、無国籍難民」とある。Heinemann Alexander は『移住者住所録』に「ベルリン出身、ピアニスト」とあり、やはり Alcock ハイムの住人である。『外人名簿』には「68歳、音楽家、ドイツ難民」と記載されている。K. P. Loewenberger はユダヤ人難民による「室内管弦楽団1939」の設立者であり、ピアニストだった。

14. Hugo Kaufmann は『移住者住所録』に「ベルリン出身、商人」とあり、『外人名簿』に「63歳、質屋店主、ドイツ難民」とある。

15. 上海ユダヤ教区の最初のシナゴーグは1941年後半に虹口・揚樹浦地区の MacGregor Road に作られた。Marcia Reynders Ristaino: „Port of Last Resort“. Stanford, California（Stanford University Press）2001. S. 306.

16. Leopold Steinhardt は『外人名簿』に「57歳、無職、ドイツ難民」と記載されている。９月14日号（創刊号）における記述から Steinhardt が上海ユダヤ教区設立の中心人物であることは明らかだったが、教区の会長であることはこの記事で初めて明らかになった。

17. Edgar Götzel は『外人名簿』に「54歳、（店舗？、家屋？）所有者、ドイツ難民」とある。Julius Stern は『移住者住所録』に「ウィーン出身、商人」とあり、『外人名簿』に「46歳、商人、ドイツ難民（？）」とある。Samet 博士は『移住者住所録』に「Adof Samet、ウィーン出身」とあり、その住所の「341 Route Cardinal Mercier」はフランス租界の高級住宅地に位置する。『外人

名簿』には「42歳、会計士、オーストリア難民」とある。Arthur Braun は『移住者住所録』に「ドレスデン出身、商人」とあり、『外人名簿』に「44歳、商人、ドイツ難民」とある。Frederic Bloch は『移住者住所録』に「Frederic Block、『(Shanghai) Jewish Chronicle』広告管理者」とある。Lesser 博士は『移住者住所録』に「Fritz Lesser、ベルリン出身、歯科医」とあり、『外人名簿』に「56歳、無職、ドイツ難民」とある。

18. Kurt Radt は『移住者住所録』に「ハム出身、教師」と、『外人名簿』に「34歳、教師、ドイツ難民」とある。
19. ラビ Sober については注４を、Hersch Friedmann については注13を参照。
20. Heinz Compart は『外人名簿』に「19歳、従業員、ドイツ難民」とある。その父親の Ernst Compart は『移住者住所録』に「ベルリン出身、商人」とあり、『外人名簿』に「52歳、店舗所有者、ドイツ難民」とある。
21. ユダヤ教区の事務所は50/28 Ward Road にあった。Max Warschauer は『移住者住所録』に「ボイテン出身、先唱者」とあり、その住所の「255 Route Cohen」はフランス租界の高級住宅地に位置する。『外人名簿』には「33歳、主任先唱者、ドイツ難民」とある。
22. この号は全６ページ中、第３面と第４面が保存されていない。
23. Jacob Gesang は『移住者住所録』に「ベルリン出身、ユダヤ書籍販売」とあり、『外人名簿』に「58歳、本屋、無国籍難民」とある。
24. ユダヤ教区新聞の後継である『Juedisches Nachrichtenblatt』の1940年８月２日号（創刊号）の第１面の記事「創刊に寄せて」では、ユダヤ教区の会長が Fritz Lesser 博士になっており、Leopold Steinhardt から交代したことが分かる。Kranzler によれば、教区の初めての普通選挙は1941年６月29日に行われた。David Kranzler: „Japanese, Nazis & Jews — The Jewish Refugee Community of Shanghai, 1938-1945“. S. 415.
25. 上海ユダヤ人学校は1931年にセファルディ系ユダヤ人社会が蘇州河以南の共同租界に作り、セファルディ系だけでなくロシア系の子弟も、そして中欧系ユダヤ人難民の子弟も移住の初期には通っていた。Seymor Road シナゴーグに隣接していた。
26. Martin Epstein は『移住者住所録』に「ピアニスト」と、『外人名簿』に「60歳、教師、ドイツ難民」とある。Rotenberg は『移住者住所録』に「Samuel Rotenberg、ベルリン出身、ピアニスト」とある。
27. David Kranzler: „Japanese, Nazis & Jews — The Jewish Refugee Community of Shanghai, 1938-1945“. S. 427. ユダヤ人難民が発行した日刊紙『Shanghai Jewish Chronicle』の1939年10月22日号には、ユダヤ人難民の子弟向けのタルムード・トーラーの開校が予告され，入学申請受付の案内が掲載されている。拙稿「『Shanghai Jewish Chronicle』（1939年）の記事から」、『言語文化論究』（26）2011年、九州大学大学院言語文化研究院、162～163頁。
28. 存在したはずの第５面以降が保存されていないのではないと考える理由は、毎号の最終ページ（11月17日号のみ第５面）にある発行、編集、広告受付等の欄が、12月29日号では第４面に掲載されているからである。
29. 「新しいメンバーの補充による今日の理事会の拡大」については、注９で言及した Kurt Marx が上海を離れたこともその一因と考えられる。
30. 記事の初めに教区新聞編集部は、この弔辞を上海のユダヤ人難民による月刊誌『Gelbe Post』から転載すると説明している。『Gelbe Post』の編集者 Adolf Josef Storfer（1888～1944年）はフロイトの弟子だった。

31. Rafael Eisenberg は『移住者住所録』に「フランクフルト出身、宗教教師」とあり、その住所「100 Kingchow Road」はハイムの場所である。
32. Ehrenberg は『移住者住所録』に「ベルリン出身、宗教教師」と、『外人名簿』に「56歳、先唱者、ドイツ難民」とある。Warschauer については注21を参照。Hes は『移住者住所録』に「David Hes、ロストック出身、先唱者」と、『外人名簿』に「52歳、先唱者、ドイツ難民」とある。
33. 女性の方は「〇〇夫人」と記載され、既婚者（未亡人または離婚者）だと分かる。1944年に作成された『外人名簿』には、奇妙なことにこの結婚以前の氏名で、しかも別の男性と同居していることが記載されている。（この男性の名字は記事で紹介された女性と同じだが、同年齢なので双子でなければ恐らく兄弟ではない）。
34. 注12、注18の Kurt Radt であろうか。
35. 中欧系ユダヤ人難民が移住し始める前の1938年初め、上海ユダヤ人学校の生徒数は240人だったが、1年後の1939年初めには120人の難民子弟が加わったため満員になり、転入するのに1年も待たねばならなくなっていた。David Kranzler: „Japanese, Nazis & Jews — The Jewish Refugee Community of Shanghai, 1938-1945“. S. 390.; I. Betty Grebenschikoff: „Once My Name Was Sara“. New Jersey（Original Seven Publishing Co.）1993. S. 65 u. 67.
36. ハヌカ祭の折に上海ユダヤ人学校でセファルディ系ユダヤ人の子弟たちに英語で話をしたと12月22日号（第15号）で報じられたラビ Karlheinz Sober であろうか。
37. 紀元前120年頃～40年に生きたパリサイ派の学者で、ユダヤ最高法院の長だった。

本稿は JSPS 科研費24520806の助成を受けたものです。